

## 心理学領域における原風景研究の成果と課題：多様な研究領域の知見を踏まえた展望

森田，虹大  
九州大学大学院人間環境学府

佐々木，玲仁  
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/7409203>

---

出版情報：九州大学心理学研究．27，pp.33-42，2026-03-05．九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン：  
権利関係：



# 心理学領域における原風景研究の成果と課題 ——多様な研究領域の知見を踏まえた展望——

森田 虹大 九州大学大学院人間環境学府  
佐々木玲仁 九州大学大学院人間環境学研究院

## Findings and Challenges of Genfūkei Research in Psychology: Insights from Diverse Fields and Future Directions

Kodai Morita (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Reiji Sasaki (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This study reviews the literature on genfūkei (“primal landscapes”) to systematically organize psychological research findings, examine issues using insights from other disciplines, and present future directions. Genfūkei research originated in literature and later expanded into six additional fields—cultural anthropology, agriculture, psychology, architecture, geography, and education—resulting in seven domains. After outlining trends in these areas, we grouped psychological findings into nine categories: components, spatial structures, recollection experiences, drawing experiences, narrative experiences, imagery experiences, meanings and functions, periods of experience, and projection, healing, and loss. The discussion identified three main challenges: the unclear conceptual framework of genfūkei, limited understanding of recollection experiences, and ambiguity in distinguishing between “meaning” and “function.” We reconsidered these issues using evidence from other fields. We conclude that a comprehensive understanding of genfūkei requires attention to five interrelated perspectives: conceptual framework, modes of viewing, recollection experiences, meanings, and functions.

**Key Words:** Primal landscapes, Psychology, Recollection

## I. 問題と目的

心の内にふと、ある日の風景が浮かび、現在の自分が懐かしさや安らぎ、切なさなどの感情を抱いたり、その風景との結びつきを感じたりすることがある。このような心理的現象に関わる風景は、一般に「原風景」と呼ばれる。例えば、故郷の山や田んぼが広がる自然の風景、幼少期に原っぱで遊んだ時の風景、実家や通学路といった日常生活の風景などが挙げられる。本研究は、「原風景」に関する先行研究を心理学の立場からレビューするものである。

### 1. 原風景に関する既存の文献レビューの課題

原風景に関する既存の文献レビューとしては、呉 (2001)<sup>1)</sup> および樋口 (2007) がある。両者のレビューでは、原風景研究が多様な領域で展開されていることが明らかになっているが、原風景に関する知見の一部が未だ十分に検討されていないという課題がある。

まず、呉 (2001) のレビューは、心理学の立場から原風景概念を体系的に整理した最初のレビュー論文であ

る。呉は、文学、文化人類学、農学、心理学、地理学の5領域を対象に、1970年代から1990年代後半までの研究の動向を整理するとともに、原風景の特徴を明らかにした。これに続く樋口 (2007) のレビューは、臨床心理学の立場から原風景概念を体系的に整理した第2のレビュー論文である。樋口は、文学、文化人類学、農学、心理学の4領域を対象に、1970年代から2000年代前半までの文献を臨床心理学の視点から整理した。さらに、原風景概念を臨床事例の理解に適用し、心理臨床への応用可能性を示唆した。

このように、呉 (2001) と樋口 (2007) は、いずれも文学、文化人類学、農学、心理学の4領域を中心に原風景研究の動向や特徴を整理している。しかし、十分に検討されていない領域も存在する。具体的には、呉 (2001) は建築学や環境教育学の研究について、景観づくりや環境教育に焦点が置かれているとして詳細に論じていない。一方、樋口 (2007) は原風景概念の臨床心理学的示唆に主眼を置いたため、環境心理学や地理学を扱わず、建築学や環境教育学にも言及していない。このように、既存の文献レビューには未検討の領域が残されており、学際的整理が十分ではないという課題が指摘できる。

<sup>1)</sup> 呉 (2001) 『語りからみる原風景—心理学からのアプローチ—』には、呉・南 (1998a) の内容が収録されている。本研究では2001年版を1998年版の修正加筆版として扱う。

## 2. 本研究の目的と意義

未検討の領域には、心理学領域にはない独自の視点や概念が存在する可能性があり、それらの視点や概念は、心理学領域の既存の課題に新たな示唆を与え、研究展望を広げる可能性を有すると考えられる。そこで、本研究では以下の3点を目的とする。第1に、研究領域を限定せずに多様な領域の原風景研究の知見を概観すること、第2に、心理学領域の成果を体系的に整理し、その整理の過程で見出された心理学領域の課題を他領域の知見を援用して検討すること、第3に、心理学領域の原風景研究の今後の展望を提示することである。

## II. 方法

### 1. 文献の収集方法と選定手続き

本研究では、文献収集の主要な手続きとして CiNii Research におけるキーワード検索を行い、さらに4つの補足的手続きを実施した。なお、「原風景」は日本語特有の概念である可能性があり、かつ学際的整理が十分に進んでいない現状では、海外の近接概念を同列に扱うと概念の一貫性や妥当性を損なうおそれがある。そのため、まずは日本語論文における原風景概念の明確化が不可欠である。そこで、本研究では日本語論文に限定して収集を行った。

#### (1) CiNii Research を用いた文献収集

まず、CiNii Research で「原風景」をキーワードに検索を行った。検索は2025年7月に実施し、データ種別を論文および書籍に設定したところ、2,764件が抽出された。この検索結果から研究目的に即した文献を抽出するため、以下の3つの選定条件を設定した。

- ①原風景を個人の心に強く残る風景として扱う文献であること。
- ②原風景の構造や特徴、および想起主体の体験を検討している文献であること。
- ③大会報告、書評、対談などの簡易記事に該当しない文献であること。

#### (2) 4つの補足的手続き

次に、文献収集の網羅性を高めるために、以下の4つの補足的手続きを実施した。

- ①対象文献の引用文献や同一著者による他の文献を追跡し、関連研究を追加収集した。
- ②書籍については、掲載されている全ての章を確認し、既出の論文と類似する章があった場合には、同一内容であるか、加筆修正版であるかの照合を行った。
- ③ CiNii Research で閲覧不能であった文献については、国立国会図書館および九州大学図書館を通じて資料を取り寄せた。
- ④ Google Scholar を併用し、CiNii Research で収録さ

れていない文献の有無を確認した。

以上 (1) (2) の手続きを経て、最終的に66件の文献が分析対象となった。

### 2. 文献の分析手続き

文献の分析手続きは、3つの段階に区分して実施した。

#### (1) 研究領域の分類

まず、66件の文献を KJ 法 (川喜多, 2017) により研究領域別に分類した。その結果、①文学、②文化人類学、③農学 (農村計画・造園学を含む)、④心理学 (環境心理学・臨床心理学を含む)、⑤建築学 (都市計画を含む)、⑥地理学、⑦教育学 (保育・環境教育を含む) の7領域に分類された。また、各領域の文献を時系列順に配列し、一覧表を作成した (Table 1)。

#### (2) 原風景研究の展開と動向の整理

次に、各領域から初出の文献を抽出して得られた7つの文献を時系列順に配列することで、原風景研究の誕生と研究領域の展開を整理した (Table 2)。さらに、7領域の原風景研究の動向と特徴を要点に絞って整理した。

#### (3) 心理学領域の原風景研究の成果の整理

最後に、心理学領域の原風景研究の成果を KJ 法 (川喜多, 2017) により分類した。その結果、「原風景の構成要素」「原風景の空間構造」「原風景の想起体験」「原風景の描画体験」「原風景の語り体験」「原風景のイメージ体験」「原風景の意味と機能」「風景の経験時期」「原風景の投影性・治癒性・喪失性」の9つのカテゴリーに整理された。なお、9カテゴリーの整理の過程で見出された心理学領域の課題については、考察の部で論じることとした。

## III. 結果

本節では、まず、原風景研究の誕生と展開を論じる。次に、7領域の原風景研究の動向と特徴を要点に絞って論じる。そして最後に、心理学領域の原風景研究の成果を論じる。

### 1. 原風景研究の誕生と展開

原風景研究は1970年に文学領域から始まり、最初の文献は奥野 (1970) の「漂う生活空間—文学における原風景・I—」である (Table 2)。1970年代後半には岩田 (1977) が文化人類学、勝原 (1979) が農学で展開し、1980年代前半には星野・長谷川 (1981) が心理学、仙田 (1982) が建築学へと広げた。さらに1980年代後半には寺本 (1985) が地理学、1990年代前半には野中 (1993) が教育学 (環境教育) へと展開した。以上のように、原風景研究は文学、文化人類学、農学、心理学、建築学、地理学、教育学の7領域に展開している。

## 2. 7 領域の原風景研究の動向と特徴

本項では、7 領域の原風景研究の動向と特徴を要点に絞って整理する (Table 1)。

### (1) 文学

文学領域の原風景研究では、奥野健男と高橋義孝が作家の原風景と文学作品との関係を論じている。奥野 (1972, 1989)<sup>2)</sup> は、作家の原風景を幼少期・青年期の自己形成空間と捉え、それが造型力の源泉として文学を支えるとしている。また、個人固有の原風景と民族共通の原風景があるとし、自身の原風景である「原っぱ」から縄文時代の呪術空間を見出している。他方、高橋 (1978) は、「原風景」と「原光景」を対比する形で臨床事例と文学作品を読解し、原風景は過去未来、愛憎を内包する双価概念であるとしている。このように、文学領域では原風景を創造性の根源とし、過去未来、愛憎を内包する双価概念と捉えている。

### (2) 文化人類学

文化人類学領域の原風景研究では、岩田慶治と関根康正がマイクロコスモスとしての原風景を論じている。岩田 (1977) は、原風景を「幼時の忘れられない風景であり、事あるごとにたち帰り自らを力づける風景」とし、さらに、岩田 (1977, 1979, 1982, 1985, 1990, 1992) は原風景の構図を①小さな生き物が現れる前景、②自然を背景とする遠景、③前景と遠景を一体化する驚きの三層としている。他方、関根 (1982) は、原風景を「幼い頃を過ごした生活空間の風景を核に、マイクロコスモスを志向する個性的創造物としての心の風景」と定義し、生活空間のイメージモデルとしての原風景を論じている。このように、文化人類学領域では、原風景を幼少期の生活空間と捉え、その構図やマイクロコスモスへの志向性を検討している。

### (3) 農学

農学領域の原風景研究では、勝原文夫を中心に、原風景から農村や造園に資する知見を追求している。まず、勝原 (1979, 1986, 1999) は、原風景を「個人的原風景」、「国民的原風景」、「人類の原風景」の重層構造としている。次に、羽田ら (1993) は、原体験の場の連続や断続の視点から都会と田舎の原風景を比較し、両者の空間構造の差異を論じている。さらに、島田・川野 (1999) は、農村住民の原風景から、まちづくり意識や地域整備を検討している。最後に、吉村 (2004) は、原風景を「幼少期の体験を素材に、後になって生成されたもの」として捉え、原風景の成立過程を検討している。このように、農学領域では、原風景の重層構造や成立過程を捉え、農

村計画や地域整備への応用を論じている。

### (4) 心理学

心理学領域の原風景研究では、原風景の構成要素や空間構造、意味と機能など多角的に検討されている。星野と長谷川 (1981, 1982, 1983, 1985) および井上 (1995) は、構成要素や想起時の感情・感覚、意味と機能を整理している。南ら (1995) と呉・南 (2000) は、空間構造とその範囲を検討している。樋口 (2000) は描画や絵の語り合いの意味を整理し、呉・南 (1998b, 2002) と呉 (2000, 2001, 2006) は、個人語り・共同語りの構造や心理的機能を検討している。小泉 (2015) は、自由記述とイメージ体験との関連を考察している。また、原風景の投影性 (長谷川・星野, 1982; 寺本・山本, 2005) や治癒性 (樋口, 2007)、喪失性 (呉・園田, 2006) といった臨床心理学的観点から論じる研究もある。このように、心理学領域では原風景の構成要素や空間構造、主体の体験、臨床応用まで多様な視点で検討されている。

### (5) 建築学

建築学領域の原風景研究では、仙田満を中心に、原風景の空間・景観構造から子どもの遊び環境や建築設計を追求している。仙田 (1982, 1990a, 1990b) は、原風景の空間構造を分類し、建築作品のモチーフとなると述べている。岸田ら (1987)、茂原ら (1991)、澤田ら (1995) は原風景の空間・景観構造から、個人のまちづくり意識や景観評価を検討している。二輪・北尾 (2017) は、教員と学生 of 原風景を比較し、原風景にその世代の社会環境が反映されることを考察している。大澤 (2025) は、原風景の景観を「仰視型遠景」「俯瞰型遠景」「仰視型近景」の3タイプに分類し、それらを基に建築設計を提案している。このように、建築学領域では、原風景の空間・景観構造を整理し、景観評価や建築設計を検討している。

### (6) 地理学

地理学領域の原風景研究では、寺本潔と大内俊二を中心に、原風景から子どもの知覚空間や環境変化を追求している。寺本 (1985, 1986, 1988, 1990, 1993) は、文学作品の記述や大学生の回顧文・原風景画の分析から、空間構造とその拡大を考察している。大内 (1989) は、大学生の原風景が、環境変化があるにもかかわらず、自身の原風景と酷似していると指摘し、さらに1990年には原風景論の背景には生活環境の荒廃意識があると論じている。加えて1995年には日本とアメリカの原風景を比較し、生活環境の違いを考察している。その他、熊谷 (1997) と三木 (2017) は原風景の空間構造を整理している。このように、地理学領域では、原風景の空間構造を整理し、その拡大や生活環境の変化を検討している。

### (7) 教育学

教育学領域の原風景研究は、保育・学校教育の立場と

<sup>2)</sup> 奥野 (1972) 『文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想』には、奥野 (1970, 1971a, 1971b, 1971c, 1971d) の内容が収録されている。また、奥野 (1989) の増補部分は原風景を主題としたものではないため、本研究では対象外とした。

環境教育の立場の2つに大別される。保育・学校教育の立場では、原風景の視点から保育や教育のあり方が検討されている。藤江・本山(2002)は、学校の原風景の記述は学校の意味を見直す契機となると述べている。また、栗原・野尻(2005)と武田(2012)は、大学生の原風景からそれぞれ保育者像と教育者像を考察している。梅原(2007)は子どもの遊び空間の意義を論じ、山下(2012, 2014)は学校教育における原風景の位置づけを検討している。一方、環境教育の立場では、環境意識の形成や環境教育授業に原風景が応用されている。野中(1993)は、原風景の空間構造から「環境」の枠組みを、上塘・井倉(2010)は原風景の形成過程から環境教育プログラムを検討している。橋本ら(2023)は原風景地図を用いた環境教育授業を実践している。このように、教育学領域では、保育・教育のあり方や環境教育の授業実践への応用を検討している。

### 3. 心理学領域の原風景研究の成果

本項では、心理学領域の原風景研究の成果を9つのカテゴリごとに整理する。

#### (1) 原風景の構成要素

星野・長谷川(1985)および井上(1995)は、主体が想起する原風景の内部構造を検討し、「景観」「人物」「動物」「故郷」「事件」の5つの構成要素を整理している。

第1に、原風景の景観は「自然風景」「人工風景」「生活風景」「神秘風景」の4種に大別される。「自然風景」について、星野・長谷川(1985)は田舎や郊外の自然の原風景が多いと報告し、井上(1995)は「自然の風景」が69.3%を占める。「人工風景」について、星野・長谷川(1985)は都会や都市の原風景は少ないと報告し、井上(1995)は「人工的な風景」が2.2%を占める。「生活風景」について、星野・長谷川(1985)は「自宅の付近」が38.5%、「学校の付近」が18.0%、井上(1995)は「自宅」が15.1%、「学校」が12.8%を示す。「神秘風景」について、井上(1995)は「神社寺の風景」が4.4%、「秘密の洞窟」が1.7%を占める。

第2に、原風景には人物が現れることがあり、「自分」「友人」「家族」「先生」の4種に大別される。「自分」は最も多く、星野・長谷川(1985)は「自分が」が86.2%、井上(1995)は「風景の中に自分の姿」が46.9%を占める。「友人」も多く、星野・長谷川(1985)は「友人在」が48.1%、井上(1995)は「友達と一緒に」が35.2%を占める。「家族」も比較的多く、星野・長谷川(1985)は「兄弟」が31.7%、「両親」が15.3%、井上(1995)は「家族と一緒に」が20.6%を占める。「先生」もみられ、星野・長谷川(1985)は16.6%を示している。

第3に、原風景には動物が現れることがある。星野・長谷川(1985)は、小動物が現れる原風景の事例を挙げ、

小動物と子どもの遊び・生活との結びつきを述べている。また、井上(1995)は「小さな虫や動物」が10.6%、「馬・牛などの動物」が4.5%を報告している。

第4に、原風景には個人の故郷が現れることがある。星野・長谷川(1985)は、原風景と故郷の景観が一致する者は33.8%を占め、井上(1995)は「故郷の風景」が48.0%を占める。

第5に、原風景には印象的な出来事や事件が現れることがある。星野・長谷川(1985)は、原風景に現れる事件を「失敗と成功」と「不気味・恐い風景」に分類し、大怪我や発表会の成功、祖母の死などの事例を挙げている。一方、井上(1995)も「リアルな風景」が15.6%を占め、「恐ろしい風景」や「事故」も低い割合ながら現れるとしている。

#### (2) 原風景の空間構造

南ら(1995)および呉・南(2000)は、原風景を複数の場からなる空間の総体として扱い、原風景が家を中心に外側へ広がる空間構造を有することを示している。南ら(1995)は、原風景の空間を「恐怖」「秘密」「禁止」「危険」「安心」「交流」「探検」の7つに分類している。さらに、これら7空間は相互に関係し、自宅を中心とする「安心空間」を起点に「恐怖」「秘密」「危険」「禁止」の4空間が周囲に配置され、その外側に「交流」「探検」の空間が展開するとされる。一方、呉・南(2000)は原風景の空間を「遊び」と「仕事」の2つの活動の場に分類している。さらに、その活動範囲を「家の敷地内」「ドンネ(住宅地)」「ドンネ周辺」「ドンネバック(ドンネから遠く離れた空間)」の4つに分類している。

#### (3) 原風景の想起体験

星野と長谷川(1982, 1985)および井上(1995)は、原風景を想起する主体の体験に注目し、想起に伴う「感情」と「感覚」を調査している。まず、想起に伴う感情は、肯定的感情が優位である一方、否定的・両価的感情も少数みられる。長谷川・星野(1982)は、「なつかしい」(65.4%)、「楽しい」(10.4%)など肯定的感情が多く、「さみしい」(1.9%)、「こわい」(1.5%)など否定的感情は少ないことを示し、井上(1995)も肯定的感情の優位を報告している。さらに、星野・長谷川(1985)は両価的感情の存在を指摘し、その要因として過去の複合的感情や過去と現在の感情の交錯を挙げている。次に、想起に伴う感覚は、視覚に限らず聴覚を中心とした多様な感覚がみられる。星野・長谷川(1985)は、「人の声」(48%)や「物音」(31%)といった聴覚が最も多く、「匂い」(26.3%)や「肌ざわり」(21.9%)といった嗅覚・触覚も比較的多いことを報告している。一方、井上(1995)は、「多様な感覚の再現」(28.5%)や「浮遊感覚」(8.9%)など多様な感覚体験を報告している。

#### (4) 原風景の描画体験

樋口 (2000) は、原風景を描画する主体の体験に注目し、原風景の描画および絵の語り合いを通じて、多様な感情の生起や自己発見、他者理解の促進が生じることを報告している。まず描画では、幼少期の体験やイメージが鮮明に再生され、多様な感情が生起されるとともに、過去の自己に関する発見が得られるとされる。一方、絵の語り合いでは、他者の思いを共感的に理解し、感情を共有する機会となるとともに、自分と他者の原風景の違いに気付くことで、個性や生育環境の差異を認識し、他者理解を深める契機となるとされる。

#### (5) 原風景の語り体験

呉 (2001) および呉・南 (2002) は、原風景を語る主体の語りの特徴や体験に注目し、「個人語り」と「共同語り」の2観点から、語りの構造と心理的機能を整理している。

まず、原風景の個人語りの構造は、「語りの種類」と「語りタイプ」の2側面から構成され、「語りの種類」は「風景」「出来事」「評価」の3つの語り、「語りタイプ」は「風景回想」「事実説明」「行為叙述」「説明演説」「評価意味づけ」の5つのタイプに分類される (呉, 2001)。他方、原風景の共同語りの構造は「話題提供」「敷衍説明」「受け入れ反応」「確認転回質問」の4過程から構成される (呉・南, 2002)。

次に、原風景の個人語りの心理的機能は、①自己のアイデンティティに関する物語生成、②語る場での情動体験、③語る場での意味生成の3点とされる (呉, 2001)。また、②③は田畠 (1987, 1992) の「イメージの体験様式」で説明される。②では、「風景回想」「行為叙述」「説明演説」が「体験的イメージ」と位置づけられ、語る場でリアリティのある情動体験が喚起されるとされる。③では、「事実説明」「評価意味づけ」が「観察的イメージ」と位置づけられ、語る場で事実説明や意味づけが行われるとされる。他方、原風景の共同語りの心理的機能は、共同のアイデンティティに関する物語生成とされ、共同語りの4過程で個人の原風景が他者に共有され、共同の原風景へと変容するとされる (呉・南, 2002)。

#### (6) 原風景のイメージ体験

小泉 (2015) は、原風景の自由記述と「イメージの体験様式」 (田畠, 1987) との関連を検討している。小泉は、原風景の自由記述を「補助的な説明の記述」「感情の記述」「行為の記述」の3つに分類し、「観察的イメージ」優位では「補助的な説明の記述」が、「体験的イメージ」優位では「行為の記述」が多いことを示している。一方、「体験的イメージ」優位では「感情の記述」が多いと予測されたが、有意差はみられなかったとされる。

#### (7) 原風景の意味と機能

星野・長谷川 (1985) および井上 (1995) は、原風景

の意味と機能を整理している。星野・長谷川 (1985) は、意味と機能を「単純懐古」「自分の出自・帰属を示す」「自分の貴重な所有物」「安息と回復を与えてくれる」「否定的な意味」「意欲・希望の源泉」の6つに分類している。一方、井上 (1995) は、問題の中で意味と機能を「強い自我関与」「自己との出会いの場としての原風景」「安らぎの場としての原風景」「創造力の源泉としての原風景」「未来への憧れとしての原風景」の5つに、考察の中で機能を「自己との出会い」「非合理で寛容な世界」「故郷への愛着を根源において支えている風景」の3つに分類している。

#### (8) 風景の経験時期

星野・長谷川 (1985) および井上 (1995) は後に原風景となる風景の経験時期を調査し、その多くは幼少期から小学生期に経験されるが、成人期以降にも経験され得ることが示されている。星野・長谷川 (1985) は大学生を対象に、経験時期について、5歳までが42%、9歳までが99%と報告し、幼少期から小学生期に集中することを示している。一方、井上 (1995) は対象を中高年層まで拡げ、幼少期が21.8%、小学生期が35.8%に加え、成人期 (23歳以降) が16.6%を占め、成人期以降にも経験される場合があることを示している。

#### (9) 原風景の投影性・治癒性・喪失性

原風景は、投影性 (長谷川・星野, 1982; 寺本・山本, 2005)、治癒性 (樋口, 2007)、喪失性 (呉・園田, 2006) といった臨床心理学的観点からも検討されている。まず、長谷川・星野 (1982) は、自律性状態にある大学生の原風景の報告を分析し、無意識的内容の投影を示唆している。次に、寺本・山本 (2005) は、原風景の作文が投影法として有効となり得るとしている。さらに、樋口 (2007) は、臨床事例を原風景の視点から読み解き、原風景が心の故郷として患者を支え、また、場所の心のイメージとして心理面接に有効であると述べている。一方、呉・園田 (2006) は、環境心理学の立場から、原風景には「今にはない」という喪失の意味が含まれ、その想起には喪失からの再生を志向する側面があると論じている。

### IV. 考察

前節では、原風景研究の誕生と展開、7領域の原風景研究の動向と特徴、そして心理学領域の原風景研究の成果を整理した。本節では、心理学領域の成果を整理する過程で見出された課題を他領域の知見を援用して検討するとともに、今後の研究の展望を提示する。

#### 1. 心理学領域の原風景研究における課題

心理学領域の成果の整理から、心理学領域の課題とし

Table 1  
7領域における原風景に関する文献一覧

| 領域    | タイトル                                | 著者                                      | 発行年   |
|-------|-------------------------------------|-----------------------------------------|-------|
| 文学    | 漂う生活空間—文学における原風景・Ⅰ—                 | 奥野健男                                    | 1970  |
|       | 造型力の源泉—文学における原風景・Ⅱ—                 | 奥野健男                                    | 1971a |
|       | 原っぱ・隅っこ・洞窟の幻想—文学における原風景・Ⅲ—          | 奥野健男                                    | 1971b |
|       | 深層の縄文的空間—文学における原風景・Ⅳ—               | 奥野健男                                    | 1971c |
|       | 地縁・歌枕・都市空間—文学における原風景・Ⅴ—             | 奥野健男                                    | 1971d |
|       | 文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想                 | 奥野健男                                    | 1972  |
|       | 「原光景」と「原風景」                         | 高橋義孝                                    | 1978  |
|       | 増補 文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想              | 奥野健男                                    | 1989  |
| 文化人類学 | 日本文化の深層—全体像のためのフォークロア               | 岩田慶治                                    | 1977  |
|       | カミの人類学 不思議の場所をめぐる                   | 岩田慶治                                    | 1979  |
|       | 原風景試論—原風景と生活空間の創造に関する一考察—           | 関根康正                                    | 1982  |
|       | 「原風景」の構図                            | 岩田慶治                                    | 1982  |
|       | 子ども文化の原像—文化人類学的視点から                 | 岩田慶治                                    | 1985  |
|       | 花の宇宙誌                               | 岩田慶治                                    | 1990  |
|       | 日本人の原風景—自分だけがもっている一枚の風景画—           | 岩田慶治                                    | 1992  |
| 農学    | 農の美学                                | 勝原文夫                                    | 1979  |
|       | 村の美学—原風景と修景の座標                      | 勝原文夫                                    | 1986  |
|       | 原風景の空間構成に関する基礎的研究                   | 羽田季久乃, 鈴木誠, 進士五十八                       | 1993  |
|       | 環境の美学—ムラの風景とアメニティ                   | 勝原文夫                                    | 1999  |
|       | 農村における原風景とまちづくりに関する研究               | 島田正文, 川野真由美                             | 1999  |
|       | 原風景の生成に関する研究                        | 吉村晶子                                    | 2004  |
| 心理学   | 幼少期の原風景としての風土（序）その心理的意味とパターン        | 星野命, 長谷川浩一                              | 1981  |
|       | 幼少期の原風景としての風土（2）原風景の心理的測定法の検討       | 長谷川浩一, 星野命                              | 1982  |
|       | 幼少期の原風景としての風土（3）恐怖・不安のイメージ          | 星野命, 長谷川浩一                              | 1983  |
|       | 青年の「心の風土」としての原風景                    | 星野命, 長谷川浩一                              | 1985  |
|       | 原風景の心理学的研究                          | 井上佳朗                                    | 1995  |
|       | 地域における子どもの遊び環境アセスメントと親子の環境体験プログラム開発 | 南博文, 難波元貫, 塚本潔, 遠藤由美子, 上向隆, 吉田直樹, 松崎えりか | 1995  |
|       | 原風景研究の動向と展望                         | 呉宣兒, 南博文                                | 1998a |
|       | 語りから見る原風景（1）：個人内の原風景：語りの種類と語りタイプ    | 呉宣兒, 南博文                                | 1998b |
|       | 大学生の内面的世界—「喜びの体験」と「原風景」の描画の分析から     | 樋口勝也                                    | 2000  |
|       | 語りから見る原風景：語りの種類と語りタイプ               | 呉宣兒                                     | 2000  |
|       | 語りから見る原風景（2）：韓国済州島の空間的特性を中心に        | 呉宣兒, 南博文                                | 2000  |
|       | 語りからみる原風景 心理学からのアプローチ               | 呉宣兒                                     | 2001  |
|       | 語りから見る原風景（3）：共同の語り・共同の原風景           | 呉宣兒, 南博文                                | 2002  |
|       | 高校生における「こころの中の風景」が心理臨床の場で果たす役割      | 寺本陽子, 山本真由美                             | 2005  |
|       | 地域デザインにおける「原風景」の共同性：理論的・実践的モデルの考察   | 呉宣兒                                     | 2006  |
|       | 場所への愛着と原風景                          | 呉宣兒, 園田美保                               | 2006  |
|       | 原風景研究の臨床心理学への示唆                     | 樋口勝也                                    | 2007  |
|       | 心像体験が原風景の自由記述の内容に及ぼす影響              | 小泉晋一                                    | 2015  |

| 領域  | タイトル                                         | 著者                                     | 発行年   |
|-----|----------------------------------------------|----------------------------------------|-------|
| 建築学 | 原風景によるあそび空間の特性に関する研究                         | 仙田満                                    | 1982  |
|     | 都市出身者の原風景と環境評価構造に関する考察—大阪市を事例にして—            | 岸田文夫, 久隆浩                              | 1987  |
|     | こどもと住まい（上）50人の建築家の原風景                        | 仙田満                                    | 1990a |
|     | こどもと住まい（下）50人の建築家の原風景                        | 仙田満                                    | 1990b |
|     | 青年の“原風景”の特性と構造に関する研究                         | 茂原朋子, 渡辺貴介, 十代田朗                       | 1991  |
|     | 心象風景が景観の評価構造に及ぼす影響                           | 澤田幸枝, 土肥博至                             | 1995  |
|     | 子ども時代の生活風景の想起対象と想起行動に関する研究                   | 二輪有紀, 北尾靖雅                             | 2017  |
|     | 原風景からみた原初的な建築空間の在り方                          | 大澤芽吹                                   | 2025  |
| 地理学 | 自叙伝からみた大岡昇平の地理的原風景                           | 寺本潔                                    | 1985  |
|     | 大学生の回顧文にみる地理的原風景の構造                          | 寺本潔                                    | 1986  |
|     | 子ども世界の地図：秘密基地・子ども道・お化け屋敷の織りなす空間              | 寺本潔                                    | 1988  |
|     | 中大生に見る日本人の「原風景」                              | 大内俊二                                   | 1989  |
|     | 原風景および風景の認識について                              | 大内俊二                                   | 1990  |
|     | 子ども世界の原風景：こわい空間・楽しい空間・わくわくする空間               | 寺本潔                                    | 1990  |
|     | 童話作家, 新美南吉の地理的原風景—作品「家」を中心に—                 | 寺本潔                                    | 1993  |
|     | 「風景」から「風土」へ                                  | 大内俊二                                   | 1995  |
|     | お茶大生の原風景                                     | 熊谷圭知                                   | 1997  |
|     | 高校生の原風景に関する地理学的一考察—模擬授業での取り組みから—             | 三木一彦                                   | 2017  |
| 教育学 | 大学生の原風景にみる生活環境の中の自然                          | 野中健一                                   | 1993  |
|     | 学校の原風景としての語りの構成                              | 藤江康彦, 本山方子                             | 2002  |
|     | 原風景としての幼児期—保育者養成課程学生の思い出し記録から—               | 栗原泰子, 野尻裕子                             | 2005  |
|     | 子どもの遊び場—和歌山大学学生にみる原風景                        | 梅原清子                                   | 2007  |
|     | 個人の持つ原風景の形成プロセスと環境教育活動が及ぼす影響                 | 上塘禎, 井倉洋二                              | 2010  |
|     | 絵画表現による自己の再確認—子ども基礎演習「私の原風景」「自画像」を通して—       | 武田雅行                                   | 2012  |
|     | 原風景の位相と教育についての試論                             | 山下暁子                                   | 2012  |
|     | 原風景を再考する—故郷論の視点から—                           | 山下暁子                                   | 2014  |
|     | 高校の教科横断的授業における原風景地図の活用—環境および文化的多様性の相互理解のために— | 橋本操, 林日佳理, 佐賀達矢, 野中健一, Donnavan Kruger | 2023  |

Table 2  
7 領域における初出の文献

| 領域    | 著者           | タイトル                         |
|-------|--------------|------------------------------|
| 文学    | 奥野（1970）     | 漂う生活空間—文学における原風景・Ⅰ—          |
| 文化人類学 | 岩田（1977）     | 日本文化の深層—全体像のためのフォークロア        |
| 農学    | 勝原（1979）     | 農の美学                         |
| 心理学   | 星野・長谷川（1981） | 幼少期の原風景としての風土（序）その心理的意味とパターン |
| 建築学   | 仙田（1982）     | 原風景によるあそび空間の特性に関する研究         |
| 地理学   | 寺本（1985）     | 自叙伝からみた大岡昇平の地理的原風景           |
| 教育学   | 野中（1993）     | 大学生の原風景にみる生活環境の中の自然          |

て以下の3つが見出される。

まず、(1) 原風景の構成要素と(2) 原風景の空間構造の知見から、第1の課題として「原風景概念の枠組みの不明確さ」が見出される。構成要素に着目した研究(星野・長谷川, 1985; 井上, 1995)は、原風景を主体が想起する「単一の景観」のように扱い、その内部構造を整理している。一方、空間構造に着目した研究(南ら, 1995; 呉・南, 2000)は、原風景を「複数の場からなる空間の総体」として扱い、場の配置や範囲を整理している。このように、原風景は「単一の景観」を指すのか、「複数の場からなる空間の総体」を指すのが不明確であり、概念の枠組みは統一されていない。

次に、(5) 原風景の語り体験と(6) 原風景のイメージ体験の知見から、第2の課題として「主体の想起体験の様式の未解明」が見出される。語り研究(呉, 2001)は、語り時の情動体験を「体験的イメージ」で説明している。一方、自由記述研究(小泉, 2015)は、「体験的イメージ」が優位でも「感情の記述」は多くならないとしている。このように、語りと自由記述で想起体験の様相が異なり、「どのように体験しているのか」という想起体験の様式は未だ十分に解明されていない。加えて、想起体験を捉える視点として「どのように眺めているのか」という眺望様式が重要と考えられるが、語りや自由記述では把握しにくい。

最後に、(7) 原風景の意味と機能の知見から、第3の課題として「原風景の意味と機能の区別の不明確さ」が見出される。意味と機能に着目した研究(星野・長谷川, 1985; 井上, 1995)は、意味と機能を区別せずに整理しており、原風景の意味は原風景自体に有るのか主体が付与するのかが、機能は原風景自体に備わるのか主体の想起によるのかが曖昧である。主体の想起体験の様式を検討するうえでも、意味と機能の区別を明確にする必要がある。

以上を踏まえ、本稿ではこれら3つの課題を他領域の知見を援用して検討する。

## 2. 原風景概念の枠組みの整理

第1の課題に対し、農学の羽田ら(1993)を取り上げる。羽田らは、多くの者が複数の原風景を記述したと報告している。また、都会の原風景は原体験の場が独立して個々の原風景として成立する傾向があり、一方、田舎の原風景は複数の原体験の場が結びついて1つの原風景を形成する傾向、さらに複数の原風景が連続してより大きな原風景を構成する傾向があるとしている。これらの知見は、原風景が「単一の景観」の場合もあれば「複数の場からなる空間の総体」として成立する場合もあることを示している。今後の研究では、原風景を前者あるいは後者として想起する者が存在する可能性を前提に、調

査を進める必要がある。

## 3. 主体の想起体験および眺望様式との連関の整理

第2の課題に対し、文化人類学の岩田(1977, 1979, 1982, 1990, 1992)と建築学の大澤(2025)を取り上げる。岩田(1977, 1979, 1982, 1990, 1992)は、原風景の構図を①小さな生き物が現れる前景、②自然を背景とする遠景、③前景と遠景を一体化する驚きの三層とし、原風景の構図と主体の感情体験との連関を示している。また、大澤(2025)は、原風景の景観を「仰視型遠景」、「俯瞰型遠景」、「仰視型近景」の3つに分類し、主体の眺望様式を示している。両者の知見は、主体の想起体験と眺望様式の連関を捉える視点を与えている。

## 4. 原風景の「意味」および「機能」の整理

第3の課題に対し、原風景の「意味」と「機能」を区別し、それぞれの整理を試みる。本研究では、原風景の意味を「主体が原風景から受け取る内容あるいは主体が付与する価値」、機能を「原風景が想起された際に主体に及ぼす心理的作用」と定義する。この定義を踏まえ、原風景の意味および機能を星野・長谷川(1985)、井上(1995)に加え、文学の奥野(1972)、建築学の仙田(1990a, 1990b)、文化人類学の関根(1982)の知見を援用して再整理する。

### (1) 原風景の意味

原風景の意味は、①「自己形成に関与する原始風景」、②「創造力の源泉」、③「貴重な所有物」、④「非合理で寛容な世界」の4つに整理される。まず、①「自己形成に関与する原始風景」では、原風景は自分の出自や帰属を示し(星野・長谷川, 1985)、主体と原風景は相互に影響し合いながら故郷への愛着を支える(井上, 1995)。次に、②「創造力の源泉」では、原風景は創作作品のモチーフ(奥野, 1972; 仙田, 1990a, 1990b)や生活空間のイメージモデル(関根, 1982)として創造的活動を支える。さらに、③「貴重な所有物」では、原風景は個人にとって特別な意味を有する内的資源として保持されている(星野・長谷川, 1985)。最後に、④「非合理で寛容な世界」では、原風景は現実世界の不快な体験を洗い流し、主体にとって非合理で寛容な心象世界を成す(井上, 1995)。

### (2) 原風景の機能

原風景の機能は、「安息・回復」、「活力・意欲」、「懐古・羨望」、「不安・恐怖」の4つの心理的作用に整理される。まず、「安息・回復」では、原風景は主体に安らぎを与え、心理的な安定や回復を支える(星野・長谷川, 1985; 井上, 1995; 関根, 1982)。次に、「活力・意欲」では、原風景は主体に活力を与え、将来への意欲や希望を支える(星野・長谷川, 1985)。さらに、「懐古・羨望」

では、原風景は主体に懐かしさや、「もう一度戻りたい」という羨望をもたらす（星野・長谷川，1985；井上，1995）。最後に、「不安・恐怖」では、原風景は主体に不安や恐怖を呼び起こし、心理的な不安定さや動揺をもたらす（星野・長谷川，1985）。

## 5. 原風景を包括的に捉える5つの視点の連関

以上、原風景概念の枠組み、主体の想起体験と眺望様式、原風景の意味と機能を整理したが、これらは相互に関連すると考えられる。すなわち、原風景を包括的に理解するには、①原風景概念の枠組み、②主体の想起体験、③主体の眺望様式、④原風景の意味、⑤原風景の機能の5視点の連関を捉える必要がある。具体的には、まず、主体が想起する原風景が「単一の景観」か「複数の場からなる空間の総体」かの枠組みを把握する。次に、主体の眺望様式により生じる体験を捉え、さらに、原風景の意味が主体にどのように賦活されるかを検討する。最後に、眺望様式と意味賦活が主体に及ぼす心理的作用（機能）を統合的に検討する。以上のように、原風景と主体は本質的に切り離せない関係にあり、5視点の連関を包括的に捉えることが、心理学領域における原風景研究の理論的深化に寄与すると考えられる。

## 引用文献

- 井上佳朗（1995）. 原風景の心理学的研究. 鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集, 41, 27-68.
- 岩田慶治（1977）. 日本文化の深層—全体像のためのフォークロア. 諸君, 9(11), 140-162.
- 岩田慶治（1979）. カミの人類学—不思議の場所をめぐる. 講談社.
- 岩田慶治（1982）. 「原風景」の構図. 季刊人類学, 13(1), 125-131.
- 岩田慶治（1985）. 子ども文化の原像—文化人類学的視点から. 日本放送出版協会. (編著)
- 岩田慶治（1990）. 花の宇宙誌. 青土社.
- 岩田慶治（1992）. 日本人の原風景—自分だけがもっている一枚の風景画—. 淡交社.
- 梅原清子（2007）. 子どもの遊び場—和歌山大学学生にみる原風景. 和歌山大学教育学部紀要（教育科学）, 57, 85-93.
- 大内俊二（1989）. 中大人に見る日本人の「原風景」. 中央評論, 41(1), 65-69.
- 大内俊二（1990）. 原風景および風景の認識について. 中央評論, 42(4), 86-93.
- 大内俊二（1995）. 「風景」から「風土」へ. 中央大学論集, 16, 13-23.
- 大澤芽吹（2025）. 原風景からみた原初的な建築空間の在り方. KGPS review, 32, 19-36.
- 奥野健男（1970）. 漂う生活空間—文学における原風景・Ⅰ—. すばる, 2, 146-157.
- 奥野健男（1971a）. 造型力の源泉—文学における原風景・Ⅱ—. すばる, 3, 90-101.
- 奥野健男（1971b）. 原っぱ・隅っこ・洞窟の幻想—文学における原風景・Ⅲ—. すばる, 4, 33-53.
- 奥野健男（1971c）. 深層の縄文の空間—文学における原風景・Ⅳ—. すばる, 5, 70-81.
- 奥野健男（1971d）. 地縁・歌枕・都市空間—文学における原風景・Ⅴ—. すばる, 6, 25-51.
- 奥野健男（1972）. 文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想. 集英社.
- 奥野健男（1989）. 増補 文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想. 集英社.
- 呉 宣児（2000）. 語りから見る原風景：語りの種類と語りタイプ. 発達心理学研究, 11(2), 132-145.
- 呉 宣児（2001）. 語りからみる原風景—心理学からのアプローチ. 萌文社.
- 呉 宣児（2006）. 地域デザインにおける「原風景」の共同性：理論的・実践的モデルの考察. 人間・環境学会誌, 9(2), 1-10.
- 呉 宣児・園田美保（2006）. 場所への愛着と原風景. 南博文（編）『環境心理学の新しいかたち（心理学の新しいかたち10）』誠信書房, 215-239.
- 呉 宣児・南 博文（1998a）. 原風景研究の動向と展望. 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, 43(2), 125-140.
- 呉 宣児・南 博文（1998b）. 語りから見る原風景（1）：個人内の原風景：語りの種類と語りタイプ. 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, 42(2), 93-104.
- 呉 宣児・南 博文（2000）. 語りから見る原風景（2）：韓国済州島の空間的特性を中心に. 九州大学心理学研究, 1, 123-137.
- 呉 宣児・南 博文（2002）. 語りから見る原風景（3）：共同の語り・共同の原風景. 九州大学心理学研究, 3, 175-186.
- 勝原文夫（1979）. 農の美学. 論創社.
- 勝原文夫（1986）. 村の美学—原風景と修景の座標. 論創社.
- 勝原文夫（1999）. 環境の美学—ムラの風景とアメニティ. 論創社.
- 上塘 禎・井倉洋二（2010）. 個人の持つ原風景の形成プロセスと環境教育活動が及ぼす影響. 鹿児島大学農学部演習林研究報告, 37, 21-28.
- 川喜多二郎（2017）. 発想法—創造性開発のために. 中央公論新社.
- 岸田文夫・久 隆浩（1987）. 都市出身者の原風景と環

- 境評価構造に関する考察—大阪市を事例にして—, 日本建築学会近畿支部研究報告集 (計画系), 27, 645-648.
- 熊谷圭知 (1997). お茶大生の実風景. お茶の水地理, 38, 35-51.
- 栗原泰子・野尻裕子 (2005). 実風景としての幼児期—保育者養成課程学生の思い出記録から—, 川村学園女子大学研究紀要, 16(2), 13-21.
- 小泉晋一 (2015). 心像体験が実風景の自由記述の内容に及ぼす影響. 共栄大学研究論集, 13, 227-245.
- 澤田幸枝・土肥博至 (1995). 心象風景が景観の評価構造に及ぼす影響. 都市計画論文集, 30, 211-216.
- 島田正文・川野真由美 (1999). 農村における実風景とまちづくりに関する研究. 環境情報科学学術研究論文集, 13, 175-180.
- 関根康正 (1982). 実風景試論—実風景と生活空間の創造に関する一考察—, 季刊人類学, 13(1), 164-191.
- 仙田 満 (1982). 実風景によるあそび空間の特性に関する研究—大人の記憶しているあそび空間の調査研究—. 日本建築学会論文報告集, 322, 108-117.
- 仙田 満 (1990a). こどもと住まい (上) 50 人の建築家の実風景. 住まいの図書館出版局.
- 仙田 満 (1990b). こどもと住まい (下) 50 人の建築家の実風景. 住まいの図書館出版局.
- 高橋義孝 (1978). 「原光景」と「実風景」. 思想, 653, 27-35.
- 武田雅行 (2012). 絵画表現による自己の再確認—子ども基礎演習「私の実風景」「自画像」を通して—. 山口学芸研究, 3, 17-32.
- 田嶋誠一 (1987). 壺イメージ療法—その生いたちと事例研究. 創元社.
- 田嶋誠一 (1992). イメージ体験の心理学. 講談社.
- 寺本 潔 (1985). 自叙伝からみた大岡昇平の地理的実風景. 地理学報告, 61, 57-64.
- 寺本 潔 (1986). 大学生の回顧文にみる地理的実風景の構造. 地理学報告, 62, 36-43.
- 寺本 潔 (1988). 子ども世界の地図: 秘密基地・子ども道・お化け屋敷の織りなす空間. 黎明書房.
- 寺本 潔 (1990). 子ども世界の実風景: こわい空間・楽しい空間・わくわくする空間. 黎明書房.
- 寺本 潔 (1993). 童話作家, 新美南吉の地理的実風景—作品「家」を中心にして—. 地理学報告, 76, 7-17.
- 寺本陽子・山本真由美 (2005). 高校生における「こころの中の風景」が心理臨床の場で果たす役割: 実風景と心象風景. 徳島大学総合科学部人間科学研究, 13, 35-53.
- 二輪有紀・北尾靖雅 (2017). 子ども時代の生活風景の想起対象と想起行動に関する研究—異なる世代間での実風景の相違と共有—. 日本建築学会近畿支部研究発表会, 273-276.
- 野中健一 (1993). 大学生の実風景にみる生活環境の中の自然. 環境教育, 3(1), 2-18.
- 橋本 操, 林日佳理, 佐賀達矢, 野中健一, Donna-van Kruger (2023). 高校の教科横断的授業における実風景地図の活用—環境および文化的多様性の相互理解のために—. 環境教育, 32(1), 23-32.
- 長谷川浩一・星野 命 (1982). 幼少期の実風景としての風土 (2) 実風景の心理的測定法の検討. 人類科学: 九学会連合年報, 35, 105-134.
- 羽田季久乃・鈴木 誠・進士五十八 (1993). 実風景の空間構成に関する基礎的研究. 日本造園学会関東支部大会研究・報告発表要旨, 11, 17-18.
- 樋口勝也 (2000). 大学生の内面的世界—「喜びの体験」と「実風景」の描画の分析から. プール学院大学研究紀要, 40, 137-156.
- 樋口勝也 (2007). 実風景研究の臨床心理学への示唆. 追手門学院大学心理学部紀要, 1, 207-231.
- 藤江康彦・本山方子 (2002). 学校の実風景としての語りの構成. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 42, 319-335.
- 星野 命・長谷川浩一 (1981). 幼少期の実風景としての風土 (序) その心理的意味とパターン. 人類科学: 九学会連合年報, 34, 45-75.
- 星野 命・長谷川浩一 (1983). 幼少期の実風景としての風土 (3) 恐怖・不安のイメージ. 人類科学: 九学会連合年報, 36, 149-165.
- 星野 命・長谷川浩一 (1985). 青年の「心の風土」としての実風景. 九学会連合日本風土調査委員会 (編) 『日本の風土』 弘文堂, 119-153.
- 三木一彦 (2017). 高校生の実風景に関する地理学的一考察—模擬授業での取り組みから—. 文教大学教育学部紀要, 51, 7-24.
- 南 博文・難波元貫・塚本 潔・遠藤由美子・上向隆・吉田直樹・松崎えりか (1995). 地域における子どもの遊び環境アセスメントと親子の環境体験プログラム開発. マツダ財団研究報告書, 8, 57-73.
- 茂原朋子・渡辺貴介・十代田朗 (1991). 青年の“実風景”の特性と構造に関する研究. 都市計画論文集, 26, 457-462.
- 山下暁子 (2012). 実風景の位相と教育についての試論. 学校教育学研究論集, 26, 41-53.
- 山下暁子 (2014). 実風景を再考する—故郷論の視点から—. 横浜国立大学教育学会研究論集, 1, 1-12.
- 吉村晶子 (2004). 実風景の生成に関する研究. ランドスケープ研究, 67(5), 731-736.